

多様な事業・行事を実施

教育・研究環境の充実のため、周年記念事業として長久手キャンパスを整備し、記念行事として地域の皆さまにもご参加いただける講演会を開催。さらに、学園の歩みを振り返る記念誌なども発行しました。

長久手キャンパス新1号棟が完成



周年記念事業として2021年度から長久手キャンパスの整備が進められ、その一環で2023年度に完成したのが新1号棟です。2023年5月に竣工式が開催され、8階建のスタイリッシュな建物が学園関係者に公開されました。旧1号棟は、同年夏に惜しまれつつ解体工事へ。約50年にわたって多くの学生を見守った1号棟が生まれ変わり、新たな歴史を築いています。

新1号棟には、周年記念として2作品の陶板画が設置されました。

愛知淑徳学園創立120周年記念として外壁に設置されたのは、日本画家・久世直幸氏作の「蒼穹の風」。力強く爽やかな色彩が印象的で、風が渡る雄大な風景を感じさせる作品です。無限の空に夢と志を高く掲げてほしいという学生への願いが込められています。高さ12.9メートル、幅10メートルあり、外壁としては日本

最大級の日本画陶板です。

愛知淑徳大学開学50周年記念として1階多目的ホールに設置されたのは、日本画家・芝康弘氏作の「君に読む未来」。学生に幼い頃の純粋な好奇心に思いを馳せてほしいとの願いを込めた日本画陶板です。絵本の読み聞かせに夢中になる子どもたちが柔らかな筆致で生き生きと表現され、木陰の優しい陽射しやあたたかな空気感も伝わってきます。

また、1号棟前の空間は、2024年度にセンタースクエアとして整備されました。学生に憩いの場を提供すると共に、淑楓祭をはじめとするイベントではステージなど多目的に活用されます。この広場を彩るのは、121枚の陶板です。1905年から2024年までの年号やその年の出来事が書かれた120枚と、未来への思いを込めた1枚によって構成されています。

周年記念ロゴマークを生徒・学生が制作

※学年はロゴマーク制作・選考時の2024年度のものでず。

愛知淑徳学園創立120周年記念ロゴマーク

校訓や歴史をイメージし、右上に伸びる矢印が「伝統は、たちどまらない」という精神を表現。色合いも学園を象徴する青色（鉄紺色・水色）を基調とし、120周年にふさわしいと高く評価されました。

最優秀作品

愛知淑徳高等学校 2年
田部井 希実さん



淑徳マークの「S」と120周年の「120」、上向きの矢印を組み合わせた意匠を考えました。デザインにあたって、淑徳マークが数字に絡みつくように変形具合を工夫しました。また、奥に見える扇形は120周年に基づき、120度になるように調整しています。ロゴの全体の色調は、愛知淑徳中・高の制服から着想を得ました。セーラー服の襟のように扇形には三本の白線を取り入れ、淑徳生にとって馴染み深い鉄紺色が見る人の印象に残るようにバランスを調整しました。上昇する矢印のように、今後も愛知淑徳学園が伝統を継承し、成長し続けられるように思いを込めてデザインしました。

愛知淑徳大学開学50周年記念ロゴマーク

大学の理念や歴史、特色などを意識した、開学50周年にふさわしい作品を選考。斬新なアイデアをデザインに落とし込み、インパクトや躍動感、話題喚起力も感じられた点で優れていたと評価されました。

最優秀作品

創造表現学部 創造表現学科
建築・インテリアデザイン専攻 3年
伊藤 佳音さん



開学50周年の数字を横顔に見立て、将来に希望を抱き主体的に行動していく若者をイメージしてデザインしました。3本のまつ毛は大学の理念「違いを共に生きる」を実現する3つのテーマを意識し、瞳に上向きの斜線を入れることで学生の今後が良くなるように願いを込めました。「SHUKUTOKU」から「T」「H」を取って横顔と並べて見ると「50TH」と読めるようにし、風になびく髪を加えて全体をまとめることで爽やかな印象にデザインしました。目を引く面白さや文字の見やすさ、ジェンダーレスなどを意識し、大学生らしいエネルギーギッシュな雰囲気仕上げました。

物故者追悼会を 挙

2025年4月13日、

「物故者追悼会」を名古屋市中東区の富永山養念寺にて執り行い、学園関係者が参列しました。愛知淑徳学園と関わり、120年の歩みを支えてくださった物故者の皆様に哀悼の意を表すと共に、感謝の思いを込めて祈りを捧げました。



愛知淑徳大学開学50周年記念行事

ダイバーシティ共生センター講演会（2025年6月6日）



ダイバーシティ共生センターは、大学の理念「違いを共に生きる」の実現をめざし、学生・教職員一人ひとりが多様性を認め合い、尊重し合って生きる力を身につけることができるように、さまざまな支援を行っています。2025年6月6日には、講演会「国際結婚から考えるダイバーシティ・フィリピン人の妻と家庭を築き、気が付いたこと」を星が丘キャンパス記念会堂にて開催しました。

講師にお招きしたのは、国際関係学を専門とし、会社員として働きながら在日フィリピン人を中心に取材や執筆、講演活動を行う中島弘象氏。著書『フィリピンパブ嬢の社会学』は映画化されて話題を集めました。今回の講演会では、フィリピン人女性と国際結婚した中島氏が、フィリピン人を取り巻く社会の実情や、交際・結婚・子育ての中で感じたダイバーシティについてお話しくださいました。

「外国人を受け入れるために支援しようということではなく、共に生きていき、助け合い、学び合うという姿勢が大切だと思います」と語った中島氏。講演の最後には「違いを認め合う」とは、自分のことも相手のことも知り、同じところを探す作業。違いを見つけて、認めて、共通点を探してほしいと思います」というメッセージをくださいました。



食健康科学部講演会（2025年6月28日）

2025年6月28日、長久手キャンパス7号棟741教室にて、「食と健康の過去・現在・未来」と題した講演会を食健康科学部が開催しました。開学50周年記念として、食と健康に関する分野の「時代をつなぐバトン」講演会を企画し、2人の講師をお招きしました。

講演1は、法政大学人間環境学部教授の湯澤規子先生による「胃袋から考える食と健康の近代史」。産業革命期から、戦中・戦後、高度成長期、現代まで、歴史地理学の視点から「食べる」ことの意味と変化について解説されました。「食と人びとの日常史」を探りながら、現代人の食をはじめ価値観や生き方を問い直す、示唆に富む講演でした。

講演2は、宮城大学食産業学群教授の石川伸一先生による「食の未来」を夢想する「フードテック、おいしさ、分子調理の3つの視点から」。調理ロボットや3Dフードプリンターなど、フードテックによる新しい食、「おいしさ」に科学的に迫る研究、科学と技術を融合した分子調理が紹介され、食の未来について多角的に学ぶことができました。

学生や地域の方々が興味深く聞き入った、湯澤先生と石川先生の講演。時代を超えて食と健康について関心や考察を広げる、貴重な機会となりました。



建築学部が講演会「万博：多様性つながり」を2025年7月19日に長久手キャンパス7号棟741教室にて開催しました。ご登壇いただいたのは、世界的な建築家である藤本壮介氏です。会場デザインプロデューサーを務める大阪・関西万博の会場デザインテーマ「多様でありながら、ひとつ」が、愛知淑徳大学の理念「違いを共に生きる」に通じることから依頼に至りました。講演会では、藤本氏が近年に関わられた国内外の7つのプロジェクトを紹介し、建築や都市、社会における「多様性つながり」への考察を語ってくださいました。

「多様な個性をリスペクトしながらつながりをいかに生み出すか、自然と建築」、日本の伝統建築と現代技術など異なるものをいかにつなげるか、藤本氏はプロジェクトごとに考えを深め、建築の新たな可能性を探求されています。大阪・関西万博では「分断の時代といわれる今だからこそ、世界の多くの国がリアルに集まり、多様性つながりを体感することに万博開催の価値がある」との思いを、大屋根リングをはじめとする会場デザインとして形にした藤本氏。「万博で何らかの衝撃や希望を受け止め、多様な人々と共に世界の未来を考えていくことを体感して、この先の50年を築く力にしてほしい」と学生に語りかけてくださいました。建築から「違いを共に生きる」を学び、考える、意義深い時間となりました。

周年記念誌を発行



学園長だより



愛知淑徳大学 開学五十周年誌



愛知淑徳学園創立120周年記念誌

学園創立120周年・大学開学50周年を迎えるにあたり、『愛知淑徳学園創立120周年記念誌』に『愛知淑徳大学 開学五十周年誌』『学園長だより』を発行しました。学園・大学の歴史や現況を紹介するとともに、長きにわたる歩みを支えてくださった皆さまへの感謝の思い、未来への希望や誓いを伝える3冊となりました。

『愛知淑徳学園創立120周年記念誌』は、両面表紙形式を採用し、創立からの出来事や時代ごとの変遷を紹介する「歴史編」と、中高・大学の今を生き活きとした写真で伝える「現在編」で構成。それぞれの最終ページとなる見開きには「今も昔も変わらない受け継がれる『淑徳魂』」とあり、過去、現在、未来をつなぐ淑徳魂を印象づけています。

『愛知淑徳大学 開学五十周年誌』は、「今日を知り、明日に架ける。」という標語のもと、「本編」として学内各教育組織の沿革・現況・将来像が、「付編」として大学関連各種資料が、十年後の読者を想定してまとめられています。

『学園長だより』は、小林素文学園長の寄稿文をまとめた一冊です。新聞や学園内の発行物に寄せられた文章が再編集され、古くは1990年代にさかのぼります。学長や理事長を歴任された小林学園長のあたたかな人柄が表れた文章を通して、学園がつないできた尊い日々や、いつの時代も変わらない生徒・学生の輝きを感じ取ることができます。